

福岡市能古島の考古資料

塩 屋 勝 利

一、はじめに

博多湾に浮かぶ小島能古島。この島の考古学的知見は、同じく博多湾頭に位置する志賀島ほど周知されてはいない。「漢委奴国王」金印出土地として教科書にも掲載され、一九七三年には九州大学考古学研究室によって金印出土推定地の発掘調査と全島の一般調査が行われ、その成果が刊行されている志賀島に比べ、能古島の考古資料は一九五七年に三野章氏によって報告された弥生土器が知られているにすぎない。しかしながら島内では、高田茂廣、宇賀紀雄、久保田耕作、石橋潤三諸氏による資料の収集が行われてきたのである。今年度それらの一部が当館に寄贈・寄託されることになった。ここではその資料を紹介すると共に、能古島の考古学的環境について概観したい。なお、昭和五三年度から継続実施している福岡市教育委員会文化課による市内の文化財分布調査では、逐次その成果が刊行されている。今年度は能古島も対象地となっており、その結果

をも合わせて参照されたい。

二、能古島の歴史地理概要

地理と歴史

能古島は福岡市西区に属し、博多湾西部に浮かぶ小島である。東西一・三km、南北三・一km、面積三・九三km²の南北に長い島で、南部の浜崎から姪浜との直線距離は一・三km、西部の白鳥崎と今津の間一・八km、さらに北部の也良崎から志賀島までは二・四kmの位置にある。島の地形は卓状を呈し、南側は比較的緩かな斜面をなすが、北側から西側は海岸部から急峻な崖を形成する。島の南半中央部に標高一九五mを測る最高位があり、なだらかな起伏を見せながら平坦な台地が北部の也良崎まで続いている。島の北部から中央部にかけては花崗岩・三郡変成岩類が基盤岩となり、その上を玄武岩類が覆っている。南半部では古第三系残島層が露出しており、複雑な地質構造を示している。沖積層はわずかに東側の谷部と南側に見

られる程度である。現在の集落は南側に西・江ノ口・東の各集落が連続し、東側沖積地に北浦、北部に大泊があり、港は南側だけに形成されている。沖積地とその周辺では水田や畑地、斜面部から頂部平坦面は山林、畑、果樹園として土地利用され、島の経済基盤は近郊農業を主とした半農半漁といえる。

能古島のこのような環境は、この島の歴史が弥生時代以来のわが国の歴史の節々で、大陸との交渉の門戸として頻繁に登場する博多湾沿岸平野部の動向と深く関わるものであることを思わせる。実際、断片的に残る文献史料は、十分にこのことを物語ってくれる。

その中で能古島を歴史の舞台へ初めて登場させるのは『万葉集』である。『万葉集卷十六』には、神亀年間（七二四～七二八）に起きた志賀の白水郎荒雄の遭難を悼む歌十首が載せられ、その中に、

沖つ鳥鴨とふ船の還り来ば也良の崎守早く告げこそ

沖つ鳥鴨とふ船は也良の崎廻みて遭ぎ来と聞え来ぬかも

という二首がある。

これらは、文献への能古島の初登場を示すと同時に、『日本書記』の天智天皇三年（六六四）、対馬、杵岐、筑紫への防人と烽の配置という記事に見える筑紫国の配置場所の一つであったことを推測させる。さらに『万葉集卷十五』には、天平八年（七三六）の遣新羅使一行が現在の唐泊に碇泊していた時詠んだ歌六首があり、その中にノコの地名の初現を見る。すなわち、

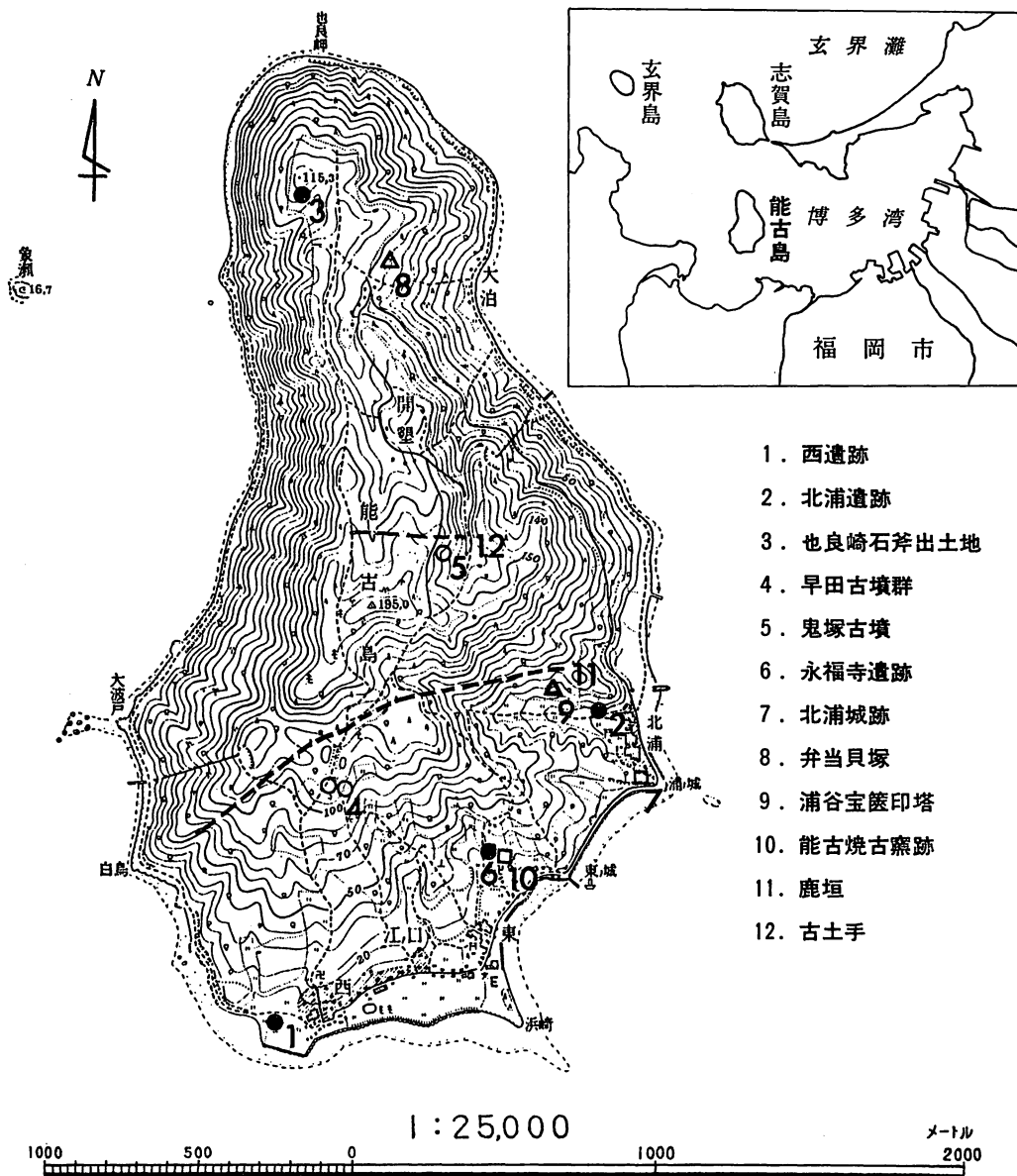
韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし

風吹けば沖つ白波恐みと能許の亭にあまた夜を寝る

の二首であり、「能許の浦」とは博多湾西部の海上を指し、「能許の亭」は唐泊を示すと考えられる。

ノコの地名は平安前期の承和十四年（八四七）に慈覚大師が記した『入唐求法巡礼行記』の「博太の西南能拳嶋下に泊船す」にも見え、さらに十世紀初頭の『延喜式卷二八』兵部省諸国馬牛牧の項に、「筑前国能嶋牛牧とあり、平安期における能古島は筑前国唯一の牛牧地であったことが知られる。また永久四年（一一一六）に成立した三善為康編の『朝野群載卷二十』には、寛仁三年（一一一九）の刀伊の来襲について記し、「筑前国那珂郡能古島」（傍点筆者）に刀伊の賊が上陸し、この島の受けた被害は人九人、馬四四頭、牛二九頭であったという。馬の被害が多いことは、牛牧と共に馬牧も行われていたことを思わせる。鎌倉時代の二度にわたる元寇においても、能古島は相当な被害を受けたと考えられる。弘安の役（二二八）では、『八幡大菩薩愚童訓』に「蒙古大唐之舟者對馬ニハ不寄壹岐之嶋ニ着自其宮崎之前成能古志賀二之嶋ソ付ニケル」とあり、志賀島と共に能古島にも元軍は上陸したと思われる。この他にも平安前期に紀貫之によって撰せられた『新撰和歌集』、鎌倉初期の順徳天皇著になる『八雲御抄』、鎌倉後期の藤原長清の撰になる『夫木和歌抄』、さらには室町時代五山文学の代表的詩僧である絶海中津の『蕉堅稿』などの詩歌に、能古の浦・のこの浦・野古島の地名を見ることが出来る。しかしながら、その後の島の歴史を語る文献史料は全く途絶えている。

能古島が「残島浦」として再び歴史に登場するのは近世初期から



第1図 能古島の位置および地形と遺跡

である。それは博多湾西部の唐泊・宮浦・今津・浜崎と共に、筑前五ヶ浦廻船の主要な根拠地として、残島の人々が帆船で全国の海を駆けめぐった最も栄えある時代であった。華々しく勇壮であった五ヶ浦の廻船業も、明治初期には完全にその姿を消す。そして残島は農業と沿岸漁業を生業とする残島村となり、昭和一六年に福岡市に合併する。

このように文献から見た能古島の歴史は、古代から中世にかけては防人と牛馬牧の島であり、大陸渡航の人々の旅愁を癒す風待ちの島であった。そしてまた刀伊や元の襲来では凌辱された島だったのであり、近世においては幕藩体制下の経済活動を支える廻船業の基地として栄えた島であったということが出来る。

それでは文献史料では知り得ない遺跡や考古資料は、島にどれ程残されているのであろうか。次に能古島の遺跡について見てみたい。

能古島の遺跡（第一図）

能古島の遺跡についてのこれまでの紹介は、すでに述べた三野章氏の報告、高田茂廣氏の『能古島物語』があるだけで、考古学的な発掘調査の記録は皆無である。今回、当館に採集資料が寄贈・寄託されたのを機会に、筆者も高田茂廣氏の御案内によって現地を何度か踏査した。その踏査結果をも合わせて能古島の遺跡を概観する。

この島の先土器・縄文時代の遺物は、島の南端斜面部の西、江ノ口、東にかけての地域から集中的に採集されている。特に江ノ口周辺の密度が濃く、次項で紹介する打製石器類が多い。また、島の北部の也良崎一帯からも黒曜石の剝片などが採集されている。

弥生時代については、三野氏が報告された弥生土器が島の西南端部の磯辺公園に隣接する墓地の断面から出土している。現地は海岸砂洲に面した標高二m程の沖積低台地であり、周辺は削平を受けたと考えられ、畑や水田となっている。畑地には弥生土器片の散布が認められ、城ノ越式の甕形土器を含んでいる。弥生中期初頭の時期には形成された遺跡であり、西遺跡と呼称する（第一図1）。東部沖積地の北浦には次項で紹介する弥生前期末の北浦遺跡があり（第一図2）、能古島で最も遡る弥生時代の集落遺跡である。弥生時代の遺跡は、島の北端也良崎の地にも認められ、太形蛤刃石斧、挟入片刃石斧などが集中的に採集されている（第一図3）。しかしながら、具体的な時期決定の手がかりとなる土器については不明である。

この島の古墳は、南半部の早田に二基の円墳が現存する（第一図4）。標高一・五mの南側にのびる丘陵東側斜面に占地し、東西一五mを隔てて築造され、いずれも両袖単室構造で南々東に開口する。現状では実測調査が不可能な状態で正確な規模と構造は不明であるが、六世紀後半に築造されたものであろう。周辺に他の古墳の存在は確認できなかったが、十分にその存在は予想される。早田古墳群のほかに、島のはば中央部の小平谷に一基の古墳があったと伝えられている。現地は展望台がある能古島最高位から北東にのびた標高一六〇mの丘陵東側斜面である。鬼塚と呼ばれ、横穴式石室の円墳であったと考えられる。昭和一六年の開墾によって完全に破壊を受けており、現地では古墳が存在した痕跡は全く認められなかった（第一図5）。また、島の東南部、永福寺裏手の標高三一・五mの丘陵先端部には、組み合せ式箱形石棺一基が現存する（第一図6）。昭和五十年頃、能古島中学校生徒によって発掘されたが、棺内からは何も出土しなかったという。現在は埋め戻された状態で保存されており、蓋石は近くの地藏尊の礎石の一部に使用されている。

歴史時代以降の遺跡では、北浦南側の海岸に面して突出する丘陵先端部に北浦城跡がある（第一図7）。博多湾を一望する標高二二mの丘陵先端部を占め、遺構としては丘陵を南北に切る幅三・五m、深さ約三mの空濠が残っている。伝承では山上憶良あるいは藤原純友の臣伊賀寿太郎の築造と言われるが、その実体は不明である。島の北部大泊には歴史時代のもので考えられる貝塚があり（第一図8）、藩政時代に鹿狩に來た黒田の殿様が腰を下ろして弁当を食べたとい

う伝承が残る弁当岩近くの、標高一〇七mを測る丘陵東側斜面の断面に認められる。里道拡幅によって生じた高さ約一mの断面に、長さ約一五m、地表下四十～八十cmの範囲でサザエやアサリを含む混貝土層がある。土器は検出されずに時期は今のところ不明である。同道の高田氏によれば、この地に集落が形成されたのは明治以降であって近世以前の記録は無いということであり、少くとも中世以前のもので考えられる。北浦集落から北西五百mを隔てた浦谷に、宝篋印塔が一基残っている(第一図9)。鎌倉後期～室町前期のものと考えられる。また永福寺遺跡に近接した場所に、能古焼古窯跡がある(第一図10)。埴積みの窯で天井部はすでに崩落しており、焼成室は六室が確認できる。周辺には白磁類の散布が認められ、この窯では磁器が生産されたことが知られる。しかしながら能古焼の起源や流通については未だ明らかではなく、近世筑前窯業史の面から、遺構の保存の面からも、この窯跡の正式な発掘調査が望まれよう。近世の遺構で最大規模を誇り、最も著名なのが鹿垣である。黒田藩の鹿狩のために天保の頃完成したものであり、島の南半部の北浦から白鳥にかけて、高さ二・二～五mの割石積の石垣が延長二kmにわたって連続する(第一図11)。また島の中央部には、古土手と呼ばれている東西に走る土塁がある。牛牧に伴う遺構とも考えられるが、築造時期や性格は不明である(第一図12)。

これまで見たように、能古島の遺跡は先土器時代から近世まで認められる。けれどもその多くが具体的内容に欠けており、島の歴史を再構成するためには今後の目的意識的な調査が必要である。

三、考古資料

今回寄贈を受けた考古資料は、高田茂廣・宇賀紀雄氏の採集された打製石器類・磨製石斧(受入番号P83-6)、高田茂廣氏所蔵の北浦遺跡出土弥生土器・砥石(同P83-7)である。寄託された資料は、久保田耕作氏所蔵の磨製石斧類(同D83-20)である。

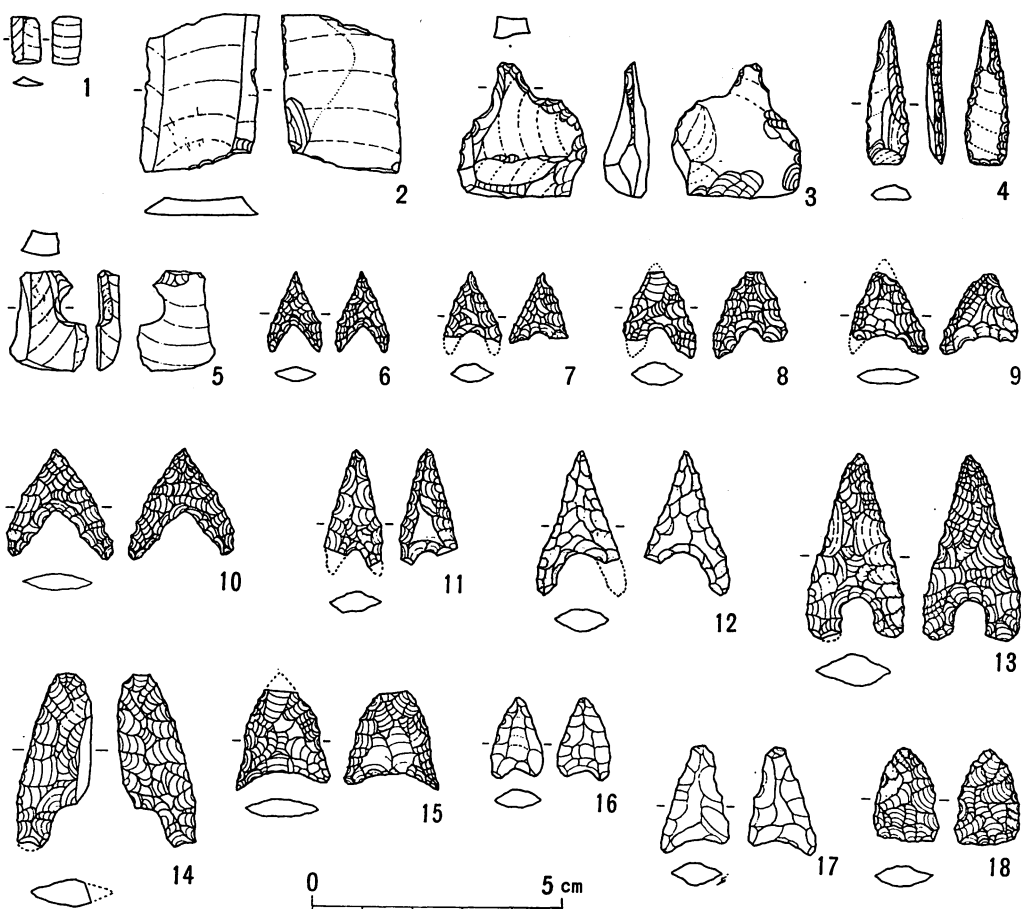
打製石器(第二図・図版一)

打製石器は細石刃一点、石刃一点、石錐二点、石匙一点、石鏃一点のほか、剝片、チップがある。採集地は能古島のほぼ全島にわたる。特に集中して採集されるのは、早田、江ノ口、北浦、也良崎である。しかしながら個々の資料についての採集地点が不明なため、時期や傾向の分析は不可能である。採集資料の石材は黒曜石が圧倒的に多く、サヌカイトやチャートは極めて少ない。黒曜石は腰岳産がほとんどであり、わずかに姫島や針尾島産を含んでいる。

細石刃(第二図1・図版一の1) 黒曜石の細長い縦長剝片を素材とし、二度の剝離加工を施して断面低三角形を呈する。半分を欠損し、現長九・六mm、幅六・三mm、厚さ一・八mmを測る。刃部に使用痕を残す。

石刃(第二図2・図版一の2) 黒曜石の縦長剝片を素材とし、断面は横長の台形状を呈す。三度の剝離で形成し、端部に調整剝離が行われ、刃部は細かい押圧剝離加工が施される。器の半分を欠損しており、現長三一・一mm、幅二二・一mm、厚さ三・五mmを測る。

石錐(第二図3・4・図版一の3・4) 3は黒曜石の自然面を



第2図 打製石器実測図(縮尺%)

残す不定形剥片を素材とし、両側から数回の剝離を加えて刃部を作出する。長さ二六mm、幅二五・五mm、厚さ九mmを測る。4は黒曜石の細長い縦長剥片を素材とし、刃部は両面からの押圧剝離による入念な加工が施されている。長さ二八・二mm、幅八・二mm、厚さ三・一mmを測る。

石匙(第二図5・図版一の5) 黒曜石の縦長剥片を素材とした縦型石匙であり、器の片面と下半部を欠損する。つまみ基部は交互剝離による調整が認められ、挟りおよび刃部は片面からの剝離による調整加工が施される。現長二〇mm、幅一五・二mm、厚さ三mmを測る。

石鏃(第二図6~18・図版一の6~18) 寄贈を受けた石鏃は破片を含めて一八点あり、一三点を図示した。いずれも無茎族であり、18のみが平基式、他は全て凹基式である。材質は12がサヌカイトで、他は黒曜石である。凹基式の石鏃の形態は、鋏形鏃の小形で基部の挟りが深いもの(6~7)、それよりやや大形のもの(8~9)、ハート形を呈し脚が極端に長いもの(10)と、三角鏃で脚が短かいもの(11)、脚が内弯気味に開くもの(12)、大形のもの(13~14)、および挟りが浅いもの(15~17)などの種類がある(表1)。

これらの打製石器は先土器時代を含み、縄文時代の

各時期にわたるものであらう。

北浦遺跡出土弥生土器・砥石（第三図～第五図・図版二～三）

これらの資料は、昭和五五年春、北浦字丸山一六一番地の森上哲彰氏宅の拡張工事の際に出土したものの一部であり、他にも土器片があったという。現地は北浦の沖積谷に南面する丘陵斜面の標高7mの地点である。現在は石垣が築かれており、土層の観察はできないが、狭い範囲で集中的に出土したということである。

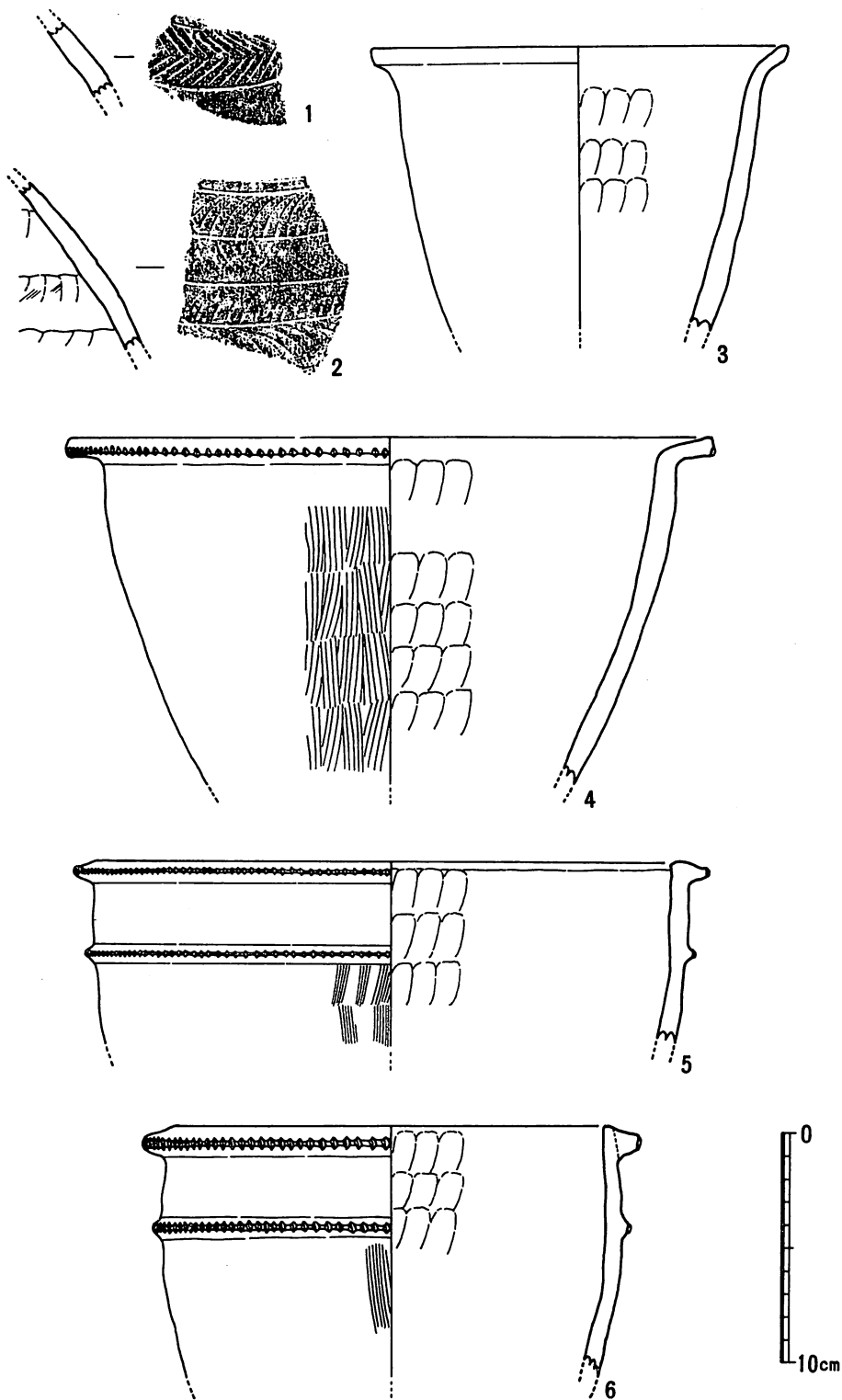
表1 石鏃計測一覧（*印は復元推定値）

No.	型式・形態	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
6	凹基無茎・鍬形黒曜石	黒曜石	一六・一一〇・〇	二・九	〇・三	完形	
7	"	"	*一六・一一一・五	三・六	〇・三五	両脚欠損	
8	"	"	*一六・九一四・〇	四・二	〇・六五	損頭・片脚欠	
9	"	"	一九・〇一五・〇	二・八	〇・八五	損頭・片脚欠	
10	"	"	二二・〇二一・〇	三・一	〇・八五	いかり・大深	
11	"・三角形	"	*二五・〇二〇・五	三・八	〇・八	両脚欠損	
12	"	サヌカイト	二八・二一八・五	四・八	一・一五	欠損脚・片脚	
13	"	黒曜石	三六・五一九・八	六・〇	二・八〇	円脚・完形	
14	"	"	*三八・〇二一・〇	五・五	二・三	円脚・片側欠損	
15	"	"	*二二・〇一八・五	三・五	〇・九五	頭欠損	
16	"	"	一六・〇一〇・〇	三・六	〇・五五	風化・磨耗	
17	"	"	二一・二三・〇	四・五	一・一	風化・磨耗	
18	平基無茎・"	"	一九・〇一二・五	三・八	〇・九五	完形	

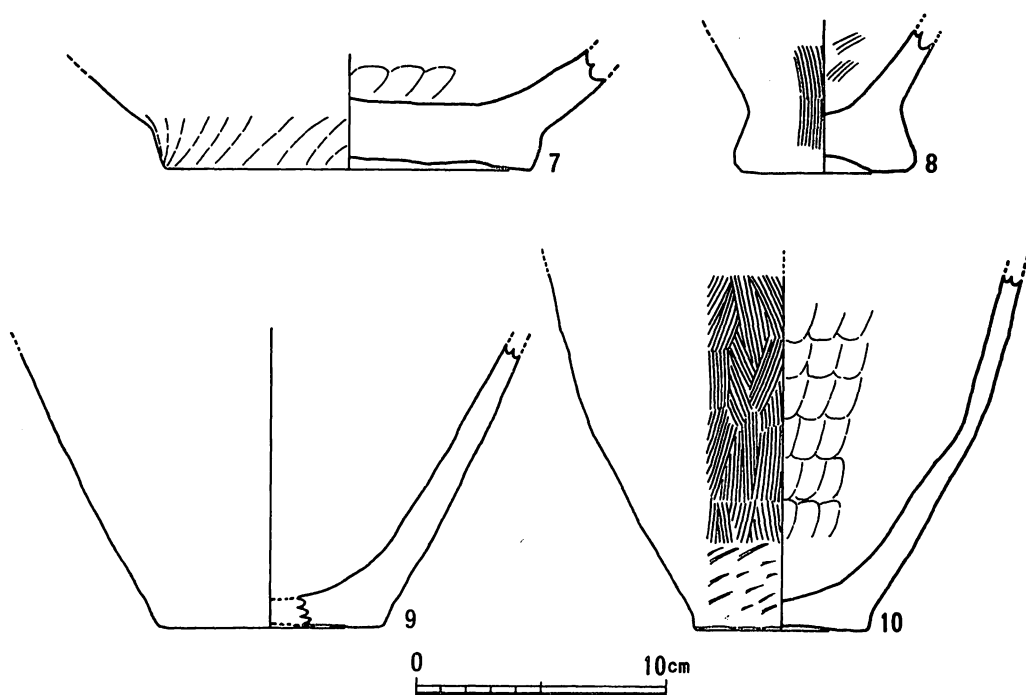
弥生土器（第三図～第四図・図版二） 壺形土器三点（1～2、7）、甕形土器七点（3～6、8～10）と、図示していない甕形土器体部片七点がある。

壺形土器 1は肩部の破片で、ヘラ状施文具による二条の沈線をめぐらし、その間に無軸羽状文を配している。表面はヘラ研磨を施し、内面はナデ調整である。胎土に細かい砂粒を含み、焼成はやや良好、器面は黄褐色を呈す。2は1よりも大きな壺形土器の肩部の破片である。頸部との境は二条の沈線で画し、肩部は四条の沈線の間に貝殻状施文具による羽状文を配している。胎土、焼成ともに良好で、器面は黄赤色を呈す。7は大型の壺形土器底部の破片で、復元底径は一四・四cmを測る。焼成は良好、器面は黄赤色である。

甕形土器 3は復元口径一八cmを測る小型の体部破片である。口縁部は如意形となり端部を丸くおさめる。体部は膨みをつくらず直線的にすばまっている。内外面ともにナデ調整であり、内面は粗雑である。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通、器面は灰褐色を呈する。4は鉢形土器に近い形態を示し、復元口径は二八cmを測る。口辺部は逆し字形に近く外反し、口縁端部下半に細かい刻目を連続する。外面は縦方向の粗いハケ目、内面はナデ調整である。胎土に粗い砂粒を含み、焼成は普通、器面は灰褐色を呈す。5～6は同一型式の甕形土器であり、断面三角形の貼り付け口縁に刻目を施し、口辺部下に刻目突帯をめぐらせるものである。5は復元口径二四・四cmを測り、外面は細かいハケ目、内面はナデ調整され、焼成は堅緻である。内面は黄褐色、外面は黒褐色を呈す。6は復元口径一八・



第3図 北浦遺跡出土弥生土器実測図Ⅰ（縮尺 $\frac{1}{3}$ ）



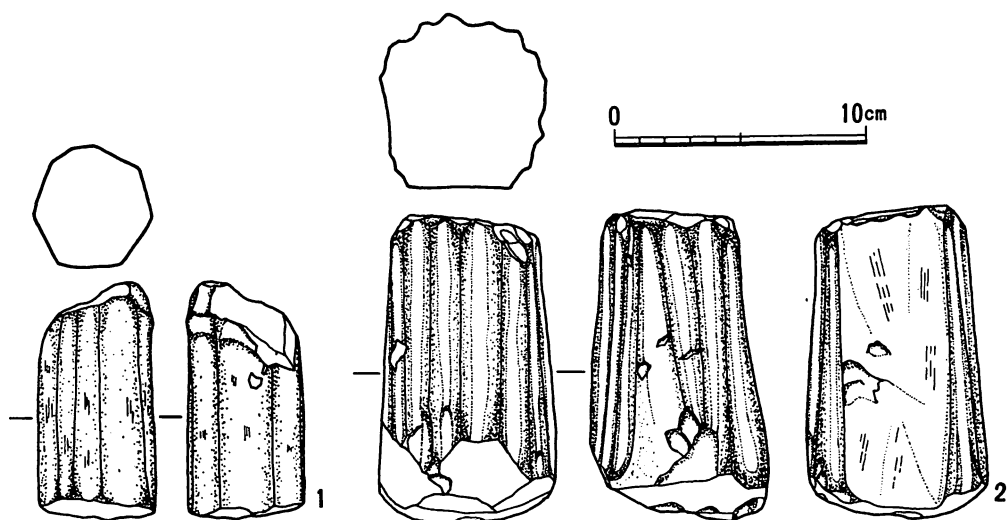
第4図 北浦遺跡出土弥生土器実測図Ⅱ (縮尺 $\frac{1}{3}$)

四 cmを測り、5に比べて突帯も刻目も大きい。器面は磨滅しており、暗い黄褐色を呈す。8と10は底部の破片である。8は細味で身厚の上げ底を呈し、5と6と同一型式となるものである。底径は七・二 cmを測り、外面はハケ目、内面はナデ調整である。焼成は良好で、器面は黄褐色である。9は復元底径八・八 cmを測り、体部は直線的に外開する。胎土は粗く焼成も不良であり、器面の磨滅が著しい。10は底径六・九 cmの底部から内弯気味に体部が立ち上がるもので、口縁部は如意形を呈すと考えられる。外面は細かいハケ目、内面はナデ調整され、焼成は堅緻であり、器面は黄灰褐色を呈す。これらの弥生土器は、板付Ⅱ式および亀ノ甲タイプの範疇に入るものであり、これらの土器から知られる北浦遺跡の営まれた時期は、弥生時代前期末頃とされよう。

砥石(第五図・図版三) 砥石は二点ある。いずれも同一地点の出土品であり、これまで述べた弥生土器に伴うものと考えられる。

1は赤紫色の縞状の斑が入る砂岩を加工したもので、両端を欠損する。全部で八面の砥ぎ面を有しており、断面も不整八角形となっている。砥ぎ面は最大幅二・五 cm、最小幅〇・九 cmの間にあり、面はやや凹むが概して平坦である。現長九・四 cm、最大径四・九 cm、最小径四・五 cmを測る。

2は黄色の斑をもつ白色砂岩製で、部分的に破損しているものの全体は完形である。一端がやや末広がりになる断面方形の角材を使用して砥石となしている。連続する二側面に幅広い平坦な砥ぎ面を作る以外は、他の側面は狭い溝状の砥ぎ面となっており、平坦砥ぎ



第5図 北浦遺跡出土砥石(縮尺 $\frac{1}{2}$)

面二、溝状砥
ぎ面十となっ
ている。長さ
一二・三 cm、
最大幅七・一
cmを測る。こ
の砥石は玉砥
石として使用
されたもので
あろう。

磨製石斧

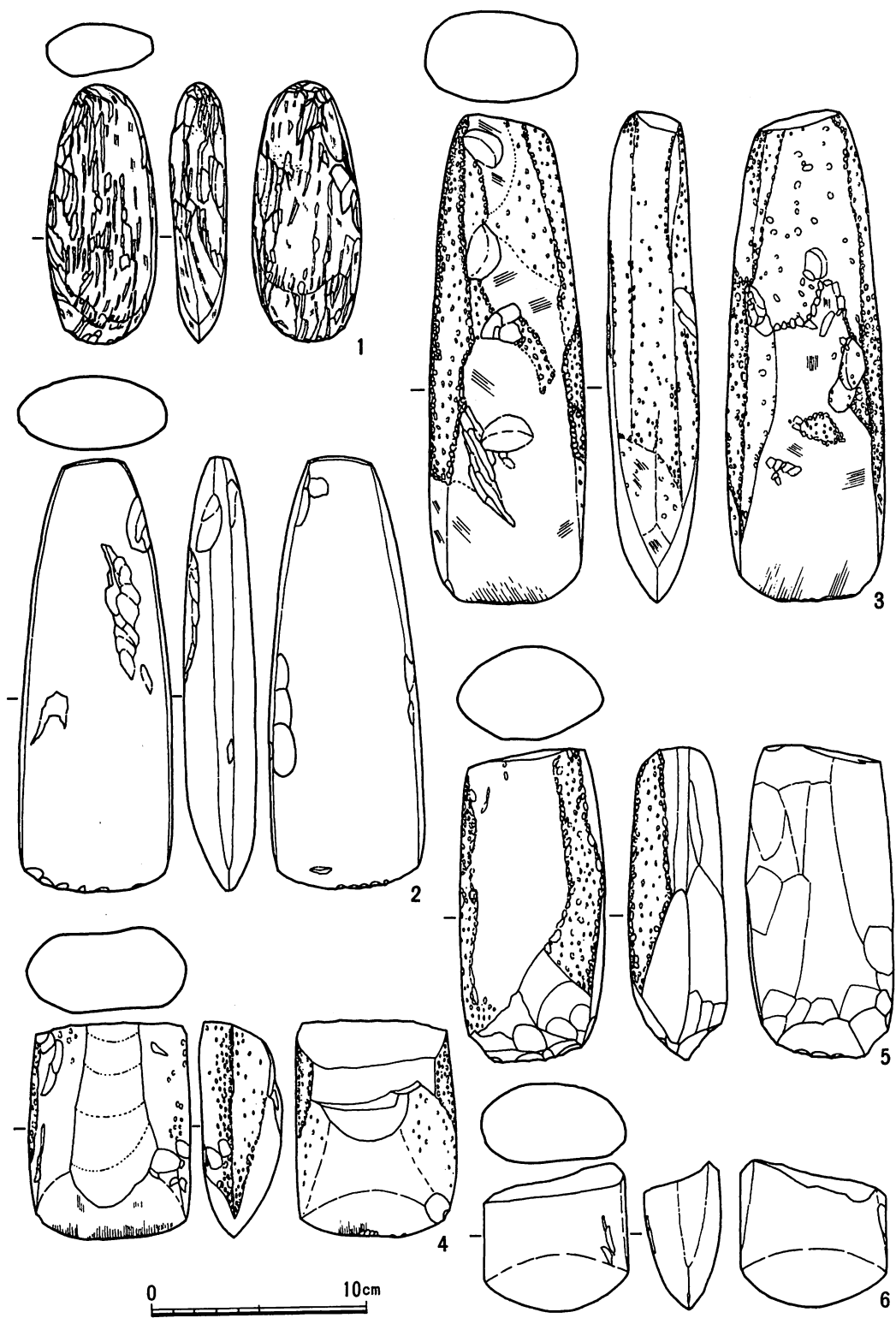
(第六図) 第
七図・図版三
と四)

磨製石斧は
全部で七点あ
り、第六図1
が島の南半部
の早田古墳群
付近から採集
された高田茂
廣氏寄贈品、
他は島の北端

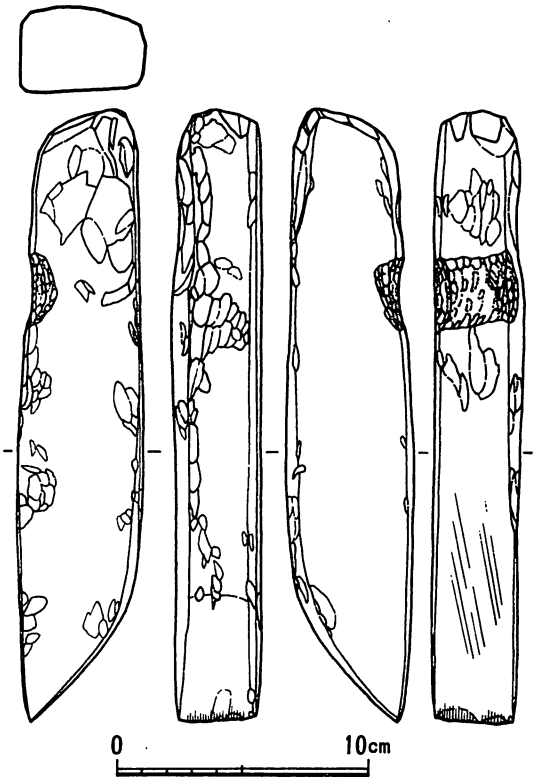
也良崎のアイランドパーク敷地内で採集された久保田耕作氏寄託品である。なお、以下の記述の部分名称は佐原真氏の定義を用いる。

〔両刃石斧(第六図1~6)〕 1は蛇紋岩の自然円礫を素材とし、

全体を研磨調整して石斧をつくる。平面形は長楕円形に近く、刃部は蛤刃(凸刃)、基端部は丸味を有している。長さ一一・九 cm、幅四・九 cm、刃長三・八 cm、厚さ二・六 cm、重さ二四五 gを測る。小形品であり楔として使用されたのであろう。2は蛇紋岩製の蛤刃石斧で、器面は風化し白色を呈す。基部はやや平坦であり、側縁は狭く平らである。刃部は鋳をつくらず、刃縁のカーブも小さい。基端面は丸味をもちわず幅が狭く平坦である。長さ一九・八 cm、厚さ三・三 cm、刃長六・五 cm、重さ六五〇 gを測る。3は玄武岩製の太形蛤刃石斧である。刃部は鋳が無く、刃縁は中心部分が直刃に近い円刃である。刃縁部中央には斜角度の使用痕が認められる。両側縁部に敲打面を残し、両主面下半部は良く研磨されている。長さ二二・四 cm、厚さ四・二 cm、幅七・〇 cm、刃長六・四 cm、重さ一一二 gを測る。4は玄武岩製太形蛤刃石斧で、基部上半部を欠損する。刃部には鋳があり、刃縁のカーブは小さい。刃と直角方向の使用痕が認められる。両側縁は敲打で仕上っている。現長一〇・〇 cm、厚さ三・六 cm、幅七・六 cm、刃長六・九 cmを測る。5は玄武岩製石斧の未製品であり、敲打段階で刃部を欠損している。長さ一四・三 cm、厚さ四・五 cm、幅六・八 cmを測る。6も玄武岩製の石斧で、基部を欠損する。刃縁はカーブが大きく、刃面は相称に近い。現長七・〇 cm、厚さ三・五 cm、刃長六・六 cmを測る。



第6図 磨製石斧実測図(縮尺 $\frac{1}{3}$)



第7図 挟入片刃石斧実測図（縮尺1/3）

挟入片刃石斧（第七図・図版四の7） 粘板岩の角礫を用い、平坦な自然剝離面を一側面にして全面の研磨により片刃石斧を作出している。刃面の傾斜角度は約40度であり、両面に使用痕が認められる。挟りは片刃面と反対の主面上位に、両側面からの敲打で入れられている。基端は丸味を有し、刃の方向に傾斜している。長さ二四・〇cm、厚さ五・一cm、幅三・六cm、刃長二・六cmを測る。これらの石斧の中で、1と2は縄文時代、他は弥生時代に属するが、具体的な時期決定は不明である。

四、おわりに

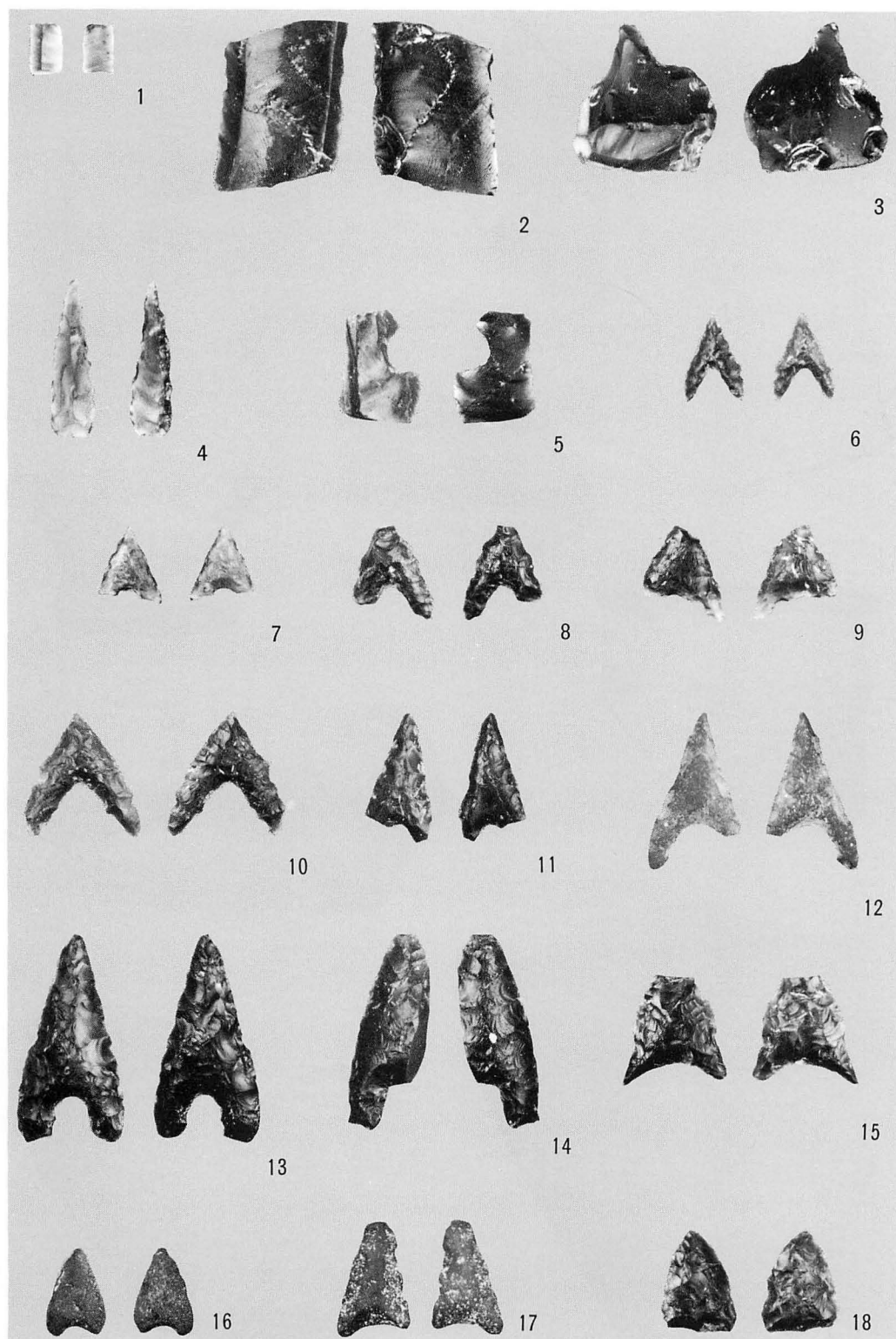
能古島採集の考古資料が今年度当館に寄贈・寄託されたのを機会

に、その紹介と共に能古島の歴史的環境にも若干ふれてみた。文献史料から推測できるこの島の歴史は確かに魅力あるものであり、今後その内容を豊富かつ具体化するためには、考古学的な調査と方法が必要であろう。ここに紹介した以外にも、島内には少なからず考古資料が収集されており、将来の目的意識的な発掘調査の先駆けとして、それらの資料の紹介の機会を別途持ちたいと考えている。

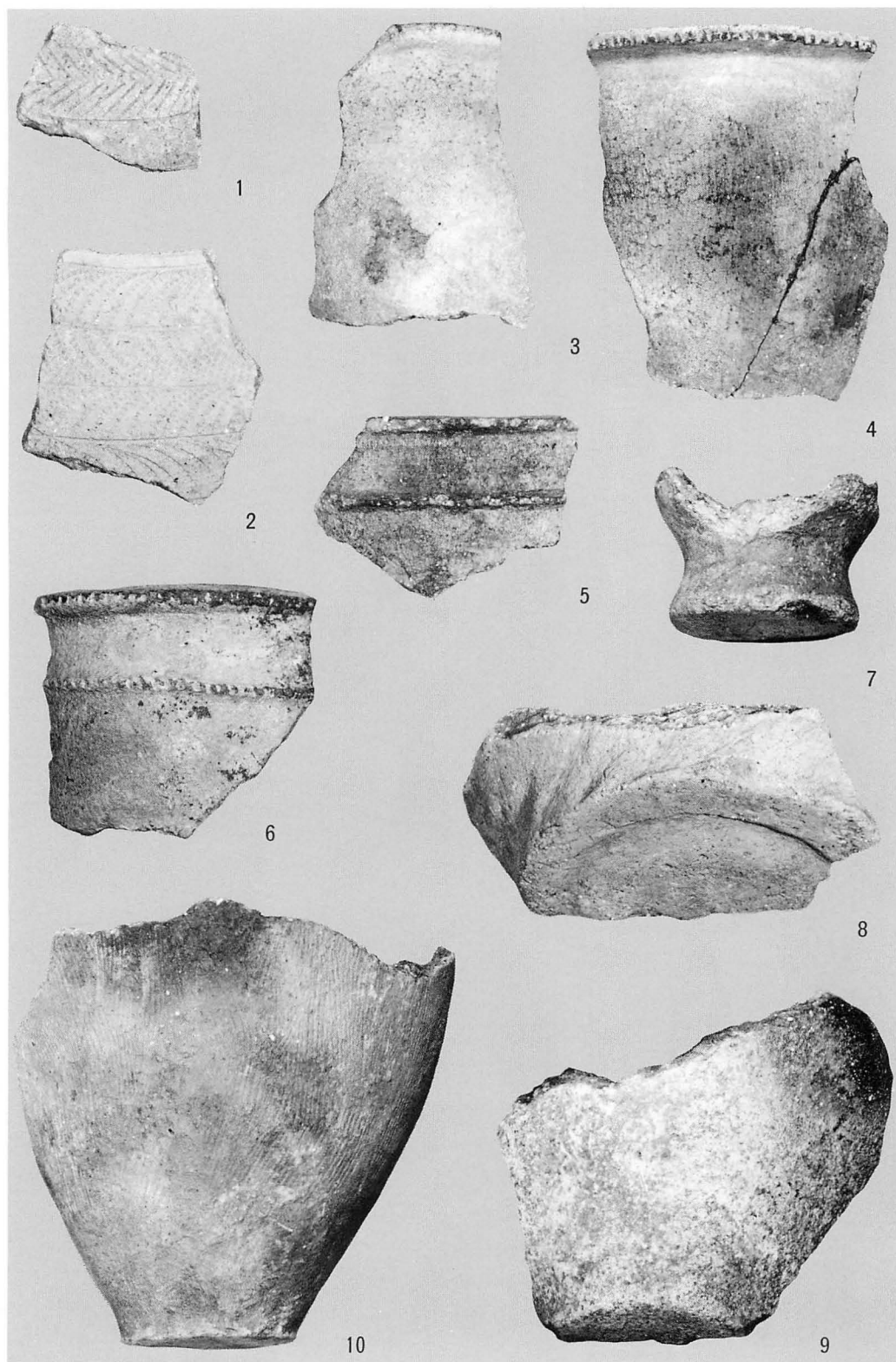
なお、本稿を草するに当っては、高田茂廣、佐々木哲哉、井沢洋一、池崎譲二、田中寿夫、小畑弘己、渡辺和子諸氏の御教示と御助言をいただいた。記して謝意を表す次第である。

註

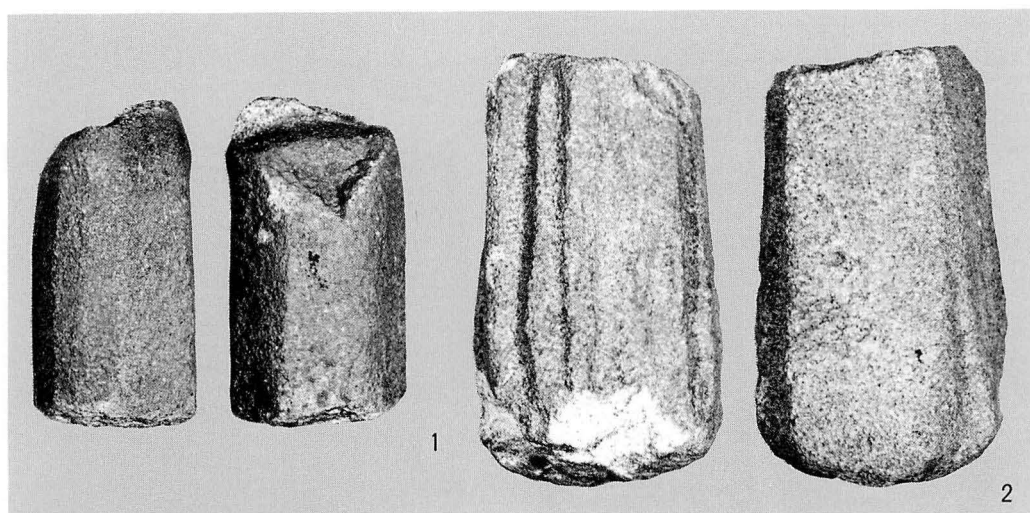
- (1) 金印遺跡調査団 志賀島 「漢委奴国王」 金印と志賀島の考古学的研究 一九七五 福岡。
- (2) 三野 章 福岡市能古島の須玖式土器 九州考古学1 一九五七 福岡。
- (3) 福岡市教育委員会 福岡市文化財分布地図（西部Ⅰ、中部・南部、東部Ⅰ、西部Ⅱ、東部Ⅱ） 一九七九～一九八三 福岡。
- (4) 九州大学教養部地学教室 能古島地質図 福岡市史別巻 36ページ 一九六八 福岡。
- (5) 吉川弘文館発行の国史大系版による。但し、伊藤常足の『太宰管内誌』や吉田東伍の『大日本地名辞書』など、『延喜式』を引用した全ての著書は「能古島」としている。
- (6) 高田茂廣 筑前五ヶ浦廻船 一九七六 福岡。
- (7) 高田茂廣 能古島物語 能古歴史研究会 一九七一 福岡。
- (8) 佐原 真 石斧論―横斧から縦斧へ― 考古論集 松崎寿和先生退官記念事業会 一九七七広島。石斧再論 森貞次郎博士古稀記念古文化論集 一九八二 福岡。



打製石器



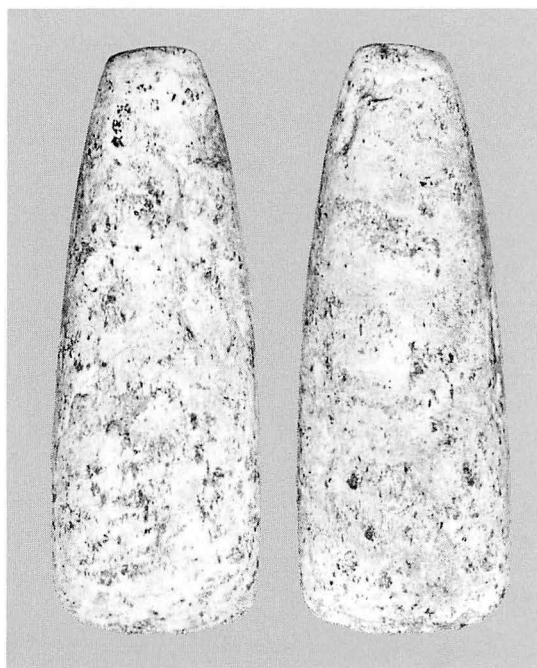
北浦遺跡出土弥生土器



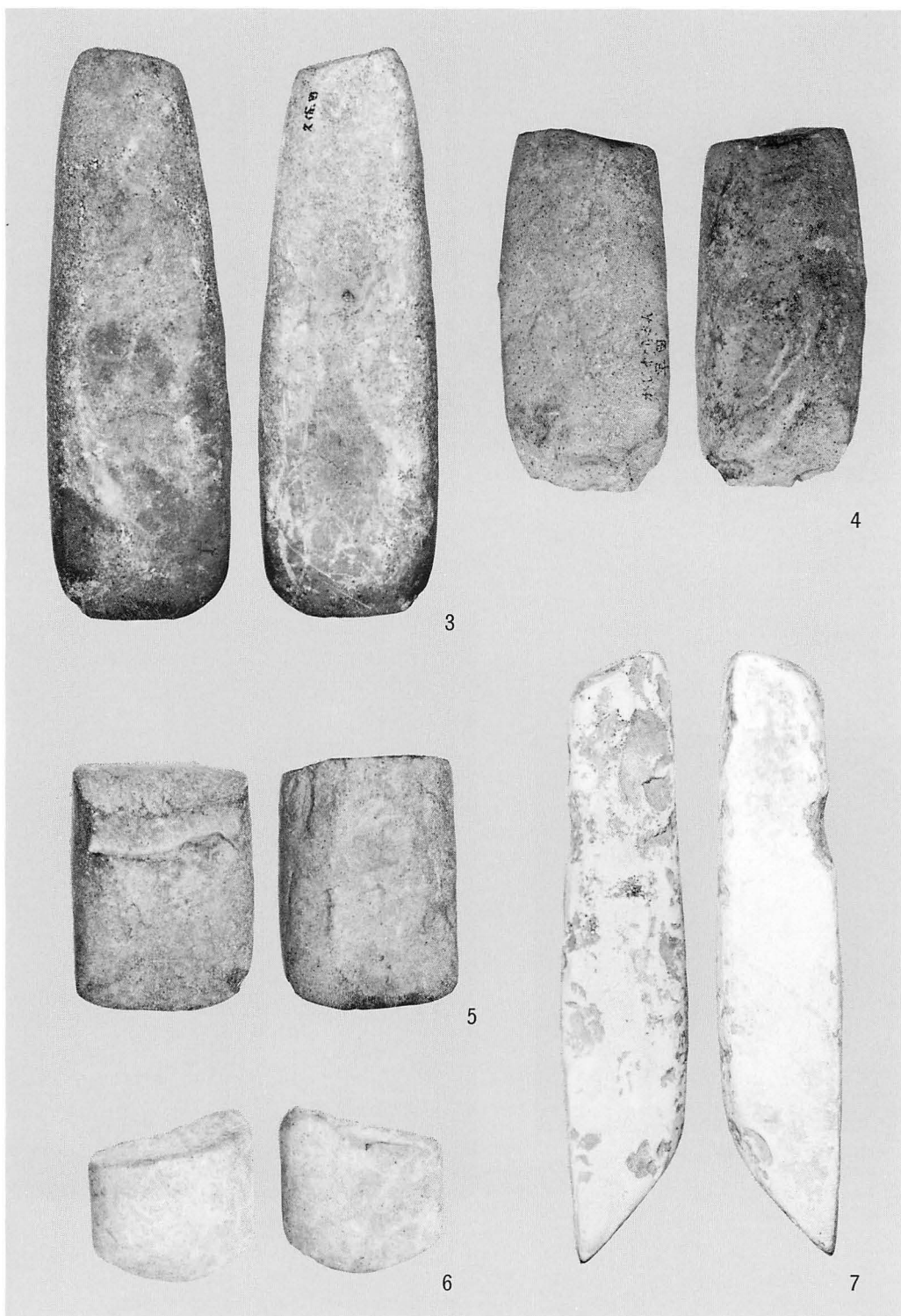
北浦遺跡出土砥石



早田出土磨製石斧



也良崎出土磨製石斧



也良崎出土磨製石斧